

二〇二三年度入学試験問題

国

語

(五〇分)

第一回 二月一日実施

〔注意〕 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
問題用紙も提出しなさい。

吉祥女子中学校

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。字数指定のあるものは、句読点やかっこなどもすべて一字に数えます。なお、問題の都合上、もとの文章から一部省略した部分があります。

「いったい、どうしたんだい」打点王氏は一人だった。球団関係者なのか、もしくは絵本の出版社の人なのか、学校で同行していた男性がいたはずだが、タクシーには乗らなかつたらしい。僕たちは、選手の横から後部座席にぐいぐいと中に入った。閉めるよ、とタクシー運転手の無愛想な声があると同時に、車が発進した。

「こんな風やってこなくても、君たちの学校には、明日また行くよ。晴れたら、野球教室を」

テレビでしか観たことがないプロ野球選手は、目の前にすると体が大きく、僕たちは圧倒された。プロのスポーツ選手とはこれほどの貫禄かんろくに満ちているのか、と眩まぶしさを覚えた。

「それなんです」安斎は強い声で訴うえた。「その野球教室でお願いがあつて」

安斎が考え出したのは、失敗*した絵画作戦よりもさらに大それた計画だった。プロ野球選手を巻き込こもうというのだ。

「同級生のことを褒ほめてもらいたいです」安斎は単刀直入に言い、そこに至り僕も、彼の閃ひらめいた計画について想像することができた。

「褒める？」

「明日、野球教室をやる時、うちのクラスに草壁*って男子がいるんだけど、彼のスウィングを見たら、『素質がある』って褒めてあげてほしいんです」

注 *失敗した絵画作戦……安斎は、美術館にある画家の絵を草壁の作品として学校に提出しようとしたことがあった。

*スウィング……バットを振る動作。

「それは」選手は言いながら、頭を整理している様子だった。「その草壁君のために？」

「そう思ってもらって、構いません」安斎は曖昧に答えた。^①厳密に言えば、草壁のためではないからだろう。

翌日の野球教室のことを思い浮かべる。草壁がバットを振り、久留米が、「上手ではないな」と感じる。「やはり、草壁は何をやっても駄目だな」と再確認する。もしかすると実際に口に出し、「草壁のフォームは駄目だ」と言う可能性もある。そこで選手がやってきて、コメントをする。「君はなかなか素質があるよ」と。

すると、どうなるか。先入観がひっくり返る。

安斎の目論みはそれだろう。

「その、誰君だっけ」

「草壁です」

「草壁君は、野球をやっているの？」

僕と安斎は顔を見合わせた。「野球は好きみたいだけど」一緒に野球をしたこともなかった。

「どうなんだろう」

「草壁を今、連れてくれば良かったな」

「でも、とにかく、草壁を褒めてあげてほしいんです」安斎は言った。雨で濡れたランドセルを背負ったままの僕たちは、車内をずいぶん狭くしていたが、選手は嫌な顔もせず、^②ただ、少し苦笑した。「もちろん、褒めてあげることではできるけど」

「できるけど？」

「嘘はつけないから。素質があるとかそんなに大きいことは言えないよ」

「素質があるかなんて、誰にも分からないと思いませんか」安斎は粘り強かった。「だったら、嘘とは限りませんよ」

選手は困惑を浮かべた。それは、小学生相手に^③厳しい現実を教えることをためらっていたのだろう。「俺もプロだから、少しは分

かるつもりだよ。素質や才能は一目瞭然だ^{いちもくりようぜん}」

「じゃあ、少し褒めるだけでも」安斎はさらに食い下がり、そうだねそれはもちろん吝か^{やぶさ}ではないよ、という言質^{げんち}を取り、ようやく少し安堵^{あんど}した。

それから僕たちは、安斎の家の近くでタクシーから降りた。選手は、「じゃあ、また明日」と優しい声をかけてくれた。

(中略)

野球教室の日は晴れた。「日ごろの行いが良かったから」と校長先生は典型的な言い回しを口にし、「どうして大人はよくそう言いたがるのかな」と疑問に感じたが、とにかく前日とは打って変わり、快晴だった。

午前中の二時間、希望する子供はバットを持ち、校庭に出て、選手の指示通りに素振り^{すぶり}の練習をした。

担任教師たちのいく人かは腕^{うで}に覚えがあるのか、子供たちにまじりバットを振った。久留米もその一人で、いつも真面目^{まじめ}な顔でチヨークを使っているだけであるし、体育の授業でも笛を吹く程度であったから、運動が得意な印象はなかったのだが、学生時代は野球部で鳴らしていたというのも嘘ではなかったらしく、美しい姿勢で素振り^{ひろうり}を披露した。

「久留米先生、恰好^{かっこう}いい」と女子から声上がり、僕と安斎は顔を見合わせ、なぜか面白くない気持ちになった。

安斎も、僕と似たり寄ったりの、情けないスウィングをしていたが、途中で、「加賀、校庭でみんなでバットを振っているのは何だか変だよな」と言った。

「新しい体操みたいだ」

「みんなで振り回して、電気でも起こしている感じにも見える」

注 *言質……後の証拠となるような言葉。

打点王氏は真面目な人だったのだろう、形式的にふらふらと歩き回り指導のふりをするのではなく、一人一人のフォームを見ては、肘や膝を触り、丁寧^{ていねい}にアドバイスをした。

僕たちのいるあたりには、一時間もしてからやっと来た。

⑦ 打点王氏は、僕と安斎に気づくと顔を少しひくつかせた。前日、タクシーに乗り込んできた二人だと分かったのだ。「昨日はとも」と挨拶する様子で、笑みも浮かべた。「どれ、振ってごらん」と声をかけてくる。

僕は、うん、とうなずき、バットを構えたが、「うん、じゃなくて、はい、だろ」と横から指摘された。見れば久留米が立っていた。スポーツウエア姿も様になり、打点王氏の隣に立つと、コーチのように見える。

「はい」僕は慌てて、言い直す。ろくな素振りはできなかつたが、打点王氏は笑うこともなく、「もう少し、顎を引いてごらん」とアドバイスをしてくれた。「体の真中に芯があるのを意識して」

はい、と答えてバットを振ると、僕自身は変化が分からぬものの、「うん、そうそう」と褒められる。安斎も、僕と似たような扱いを受けた。

そして、だ。安斎がいよいよ本来の目的に向かい、一步踏み出す。「久留米先生、草壁のフォーム、どうですか」と投げかけたのだ。

久留米は不意に言われたため、小さく驚き、同時に、草壁がどうかしたのか、と醒めた表情も浮かべた。草壁がいること自体、忘れていた気配すらあった。

草壁は、僕たちのいる場所から少し離れたところにいたが、打点王氏が近づいていくと緊張のせいなのか、顔を真っ赤にした。

「やっごらん」打点王氏が声をかける。

草壁はうなずいた。

「うなずくだけじゃなくて、返事をきちんとしなさい」久留米がすかさず注意をした。

草壁はびくつと背筋をのばし、「はい」と声を震わせた。

あたふたしながら、バットを一振りする。僕から見ても不恰好で、バランスが悪かった。腕だけで振っているため、どこか弱々しかった。

「草壁、女子じゃないんだから、何だそのフォームは」久留米の声は大きくはないのだが、低く、あたりによく聞こえる。近くにいる子供たちが、「草壁、女子みたいだって」と言い、土田か誰かが、「クサ子」と囃した。安斎が舌打ちをするのが聞こえた。久留米が意図的に言ったとは思わぬが、確かに、そういった発言により、他の子供たちが、「草壁のことを下位に扱っても良し」と決めている節はある。

安斎は縋るような目で、打点王氏を見上げた。「草壁はどうですか？」と、草壁の名前をはっきりと発音し、昨日の依頼を想起させるように言った。

打点王氏は眉を少し下げ、口元を歪めた。このスウィングを褒めるのは至難のわざ、と思ったのかもしれない。

「よし、じゃあ草壁、もう一回、やってみなさい」久留米が言ったが、そこで安斎が、「先生、黙ってて」と言い放った。

久留米は、自分に反発するような声を投げかけた安斎に、目をやった。⑧ 自分に向けられた槍の切っ先の形を、じっと確認するかのようではあった。むっとしているかどうかも分からない。

「先生がそういうことを言うと、草壁は緊張しちゃうから」安斎の目には力がこもり、声も裏返っていた。

「こんなことで緊張して、どうするんだ。緊張も何も」

「先生」あの時の安斎はよくも臆せず、喋り続けられたものだ。つくづく感心する。「草壁が何をやっても駄目みたいな言い方はやめてください」

「安斎、何を言ってるんだ」

「子供たち全員に期待してください、とは思わないですけど、駄目だと決めつけられるのはきついです」

安斎は、ここが勝負の場だと覚悟を決めていたのかもしれない。立ち向かうと肚を決めたのが分かり、僕は気が気ではなかった。打点王氏のほうはいえ、大らかなのか鈍感なのか、安斎と久留米との間で起きる火花を気に掛けることもなく、草壁のそばに歩み寄ると、「もう一回振ってみようか」と言った。

はい、と草壁は顎を引くと、すっと構えた。先ほどよりは強張りがなく、脚の開き方も良かった。

先入観を、と僕は念じていた。そのバットで吹き飛ばしてほしい、と。

もちろん草壁が、プロ顔負けの美しいスウィングを披露し、その場にいる誰もが呆気に取られ、いちやく学校の人気者になる、といった劇的な出来事が起こると期待していたわけではなかった。もちろん、そのようなことは起きなかった。草壁の一振りには、先ほどの腰砕けのものに比べればはるかに良くなっていたが、目を瞠るほどではなかった。

安斎を見ると、彼はまた、打点王氏を見上げていた。

腕を組んでいた打点王氏は、草壁を見つめ、「もう一回やってみよう」と言う。

こくりとうなずいた草壁がまた、バットを回転させる。弱いながらも、風の音がした。

「君は、野球が好きなの？」打点王氏が訊ねると、草壁はまた首だけで答えかけたが、すぐに、「はい」と言葉を足した。

「よく練習するのかな」

「テレビの試合を観て、部屋の中だけど、時々」とぼそぼそと言った。「ちゃんとは、やったことありません」

「そうか」打点王氏はそこで、少し考える間を空けた。体を捻り、安斎と僕に一瞥をくれ、久留米とも視線を合わせた。その後で、草壁の肘や肩の位置を修正した。

草壁が素振りをする。

ずいぶん良くなったのは、僕にも分かる。同時に、打点王氏が、「いいぞ！」と大きな、透明の風船でも破裂させるような、威勢の良い声を出した。まわりの子供たちからの注目が集まる。

「中学に行ったら、野球部に入ったらいいよ」打点王氏は言い、そして、僕たちが望んでいたあの言葉を口にした。「君には素質があるよ」と。

自分の周囲の景色が急に明るくなった。安斎もそうだったに違いない。^⑨ 白く輝き、^{かがや} 肚の中から光が放射される。報われた、という思いだったのか、達成した、という思いだったのか、血液が指の先にまで辿り着く、充足感があった。

草壁は目を丸くし、まばたきを何度もやった。「本当ですか」

久留米がどういう顔をしていたのか、僕は見逃していた。もしかすると、見てはいたのかもしれないが、今となっては覚えていない。

「プロの選手になれますか」草壁の顔面は朱に染まっていたが、それは恥ずかしさよりも、気持ちの高まりのためだったはずだ。久留米の立つ方向から、鼻で笑う声が聞こえたのもその時だ。何か、草壁をたしなめる台詞を発したかもしれない。

「先生、草壁には野球の素質があるかもしれないよ。もちろん、ないかもしれないし。ただ、決めつけるのはやめてください」

「安斎はどうして、そんなにムキになっているんだ」久留米が冷静に、^{たんたん} 淡々といなす。

「でも、草壁君、野球ちゃんとしてやってみたらいいかもよ」佐久間がいつの間にか、僕たちの背後に立っていた。「ほら、^⑩ 口に太鼓判押されたんだから」

草壁は首を力強く縦に振った。

恐る恐る目を向けると、打点王氏は僕の予想に反して、明るい顔をしていた。あれは、^⑩ 乗りかかった船、の気持ちだったのだろうか。それとも、先生と安斎とのやり取りから、嘘をつき通すべきだと判断したのか、そうでなければ、草壁の隠れた能力を実際に見抜いたのか、いやもしかすると、豪放磊落の大打者はあまり深いことは考えていなかったのかもしれない。彼は、草壁に向かい、「そうだね。努力すれば、きつといい選手になる」と付け足した。

久留米はそこでも落ち着き払っていた。「何だかそんな風に、持ち上げてもらってありがたいです」と打点王氏に頭を下げた。「草

壁、おまえ、本気にするんじゃないぞ」とも言った。「あくまでもお世辞だからな」

念押ねんおする口調が可笑おかしかったからか、数人が笑った。場が和なごんだといえ、和んだが、わざわざそんなことを言わなくとも、と僕は承服できぬ思いを抱いだいた。

「先生、でも」草壁が言ったのはそこで、だ。「僕は」

「何だ、草壁」

「先生、僕は」草壁はゆつくりと、「僕は、そうは、思いません」^⑪と言いつ切った。

安斎あんさいの表情がくしゃつと歪ゆがみ、笑顔えがとなるのが目に入るが、すぐに見えなくなった。なぜなら、僕も目を閉じるほど顔を歪め、笑っていたからだ。

(伊坂幸太郎『逆ソクラテス』)

問一 ～～～～線㉞「様になり」・～～～～～線㉟「一瞥をくれ」・～～～～～線㊱「太鼓判押された」とはどのような意味ですか。もっとも適当

なものを次の1～4からそれぞれ一つ選び、番号で答えなさい。

㉞ 「様になり」

1 清潔感があつて

2 洗練されて

3 堂々として

4 かつこうがついて

㉟ 「一瞥をくれ」

1 じっと見つめて

2 ちらっと見て

3 目配せをして

4 合図を送って

㊱ 「太鼓判押された」

1 力があることを保証された

2 大きさにほめてもらえた

3 直接の指導を受けられた

4 特に問題はないと言われた

問二 ——線①「厳密に言えば、草壁のためではない」とありますが、安斎の本当の目的は何ですか。「∴ため。」に続くように三十字以上三十五字以内で説明しなさい。

問三 ——線②「ただ、少し苦笑くしやうした」とありますが、この時の打点王氏の気持ちとしてもっとも適当なものを次の1～4から一つ

選び、番号で答えなさい。

1 プロの自分に対してしろうとである子供たちが意見するので不快に感じている。

2 嘘をついてまで褒めることはしたくないと思ひ、安斎のお願いにとまどっている。

3 プロとして無責任なことは言えないので、安斎のお願いをどう断るか考えている。

4 嘘をついてまで褒めることが本当に草壁のためになるのかどうかためらっている。

問四

——線③「厳しい現実」とは具体的にどのようなことを指していますか。次の にあてはまるように文中から十字以上十五字以内でぬき出し、初めの五字を書きなさい。

ということ。

問五

——線④「それはもちろん吝かではないよ」というのはどういうことですか。もつとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。「吝かではない」とは「　をする努力を惜しまない」という意味です。

- 1 自分でその草壁という少年を、プロ選手の名にかけてしつかり見極めようということ。
- 2 草壁のスウィングが少しくらい下手でも、素質があると伝えるよう努めるということ。
- 3 自分から見て草壁の才能がないと思ったら、草壁が傷つかないように伝えるということ。
- 4 草壁がバットを振るのを見て少し褒めるだけのことなら、快く引き受けるということ。

問六

——線⑤「腕に覚えがある」とは、ここではどういうことを言うのですか。十字以上十五字以内で答えなさい。

問七

——線⑥「面白くない気持ちになった」のはなぜですか。二十字以上三十字以内で説明しなさい。

問八 —— 線⑦「打点王氏は、僕と安斎に気づくと顔を少しひくつかせた」とありますが、この時の打点王氏の様子の説明として

もつとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 二人が昨日の強引な態度と同じように、今日もしつこく話しかけてくるのではないかと警戒している。
- 2 プロである自分に対して指図するかのよう二人の態度を思い出して、自尊心が傷ついている。
- 3 二人によってなれば強引にお願いを引き受けさせられたことを思い出して、緊張を感じている。
- 4 二人の頼みごとを引き受けた結果、この後嘘をつかなければならないことに気づいて困っている。

問九 —— 線⑧「自分に向けられた槍の切っ先の形を、じつと確認するかのようではあった」とは久留米先生のどのような様子を述

べているのですか。もつとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 自分に反抗するような安斎の言葉の意味をはかりかねて、その意図をさぐるうとしている。
- 2 自分に反抗するような言葉を投げかけた安斎に怒りを覚えたが、それをぐっと抑えている。
- 3 安斎の反抗的な言葉に自分がどのような対応をすべきか見当もつかず、途方に暮れている。
- 4 ふだんは素直な安斎が反抗的な言葉を投げかけてきたことが信じられず、うろたえている。

問十 —— 線⑨「白く輝き、肚の中から光が放射される」における「僕」の心情としてもっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

1 打点王氏が草壁を褒める威勢の良い声を聞いたことで、自分たちの計画が間違いなく成功すると確信し、期待に胸をおどらせている。

2 打点王氏の発言によってまわりの生徒からの注目が草壁に集まったことで、久留米に対する怒りがおさまり、穏やかな気持ちに包まれている。

3 打点王氏が草壁に対して中学進学後のアドバイスもしてくれたことで、うまくいかない焦りやいら立ちが消え、心からの安らぎを感じている。

4 打点王氏が草壁に対して望み通りの発言をしてくれたことで、それまでの心配や不安が解消し、心の底から満たされたと感じている。

問十一 —— 線⑩「乗りかかった船、の気持ち」の説明としてもっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

1 子どもたちの願いを引き受けた結果、思いがけず素質ある子どもに出会えたと高ぶる気持ち。

2 軽い気持ちで引き受けたが、今は本気になって子どもたちに力を貸そうと意気込む気持ち。

3 いったん子どもたちのお願いを引き受けた以上、途中でやめるわけにはいかないという気持ち。

4 子どもたちに頼まれたときは不安だったが、やってみると案外うまくいったと安心する気持ち。

問十二 —— 線⑩ 「僕は、そうは、思いません」とありますが、この言葉がわざわざ区切られ、ゆっくりと話されていることで、どのような効果もたらされていますか。もっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

1 相手に比べると自分は弱くて小さな存在で、迷ったり考えたりしながら自分の言葉をやつと口に行っているということを、無意識に相手にさらけ出す効果。

2 相手が自分より力のある存在だとは分かっているが、それでも自分が相手とは違う意見を持っているということを、強い意志を持って明確に示す効果。

3 自分はすでに相手をはるかにしのぐ存在であり、相手のことなどはや気にかけてもいないのだということを、相手に見せつけて思い知らせる効果。

4 相手にも意見があるのは承知しているが、自分にも考えがあるのをわかってほしいということを、おとなしそうな態度で示し相手の感情をゆさぶる効果。

問十三 —— 線⑫ 「安斎の表情がくしゃつと歪み、笑顔となるのが目に入るが、すぐに見えなくなった。なぜなら、僕も目を閉じるほど顔を歪め、笑っていたからだ」とありますが、二人が笑っていたのはなぜですか。四十字以上五十字以内で説明しなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。字数指定のあるものは、句読点やカッコなどもすべて一字に数えます。なお、問題の都合上、もとの文章から一部省略した部分があります。

砂は、変化自在で魅力的だった。表面付近は白くてさらさら。すくうと水のように流れ落ち、受け止める手に砂粒の振動がくすぐったい。少し掘ると、白い砂の下からひんやりしめった灰茶色の砂が出てくる。色が濃いほどまとまりやすいので、プリンやおだんごをつくるときは、なるべく深く掘って濃い色の砂をにぎった。

子どものころに遊んだ公園は、敷地全体に砂がしきつめられていた。みんなが力を入れていたのは落とし穴。穴を掘って、段ボールをかぶせ、白い砂をまんべんなくかけて隠す。まわりに掘りだした灰茶色の砂があると怪しまれるので、念入りになじませれば完了だ。

A、その穴にだれかが落ちることはめつたになかった。獲物を待ちきれず、はまるのは、たいてい自分。穴の存在を知らない体で歩いて、うっかり落ちる。手で掘るのでたかが知れていて、片足が少しはまる程度なのだが、深く掘れば掘るほど、ずぼっと砂に埋もれて、ひんやりした感覚が心地よかった。当然のことながら、家に帰ると、靴や服のあちこちから、ぱらぱら、ぱらぱらと際限なく砂が出てきた。

砂の上では、高いところから飛び降りても、全力で走って、全力で転んでも痛くなかった。五感をフルにつかって全身で世界と関わりあうような日々。いま思うと、生きていることのリアリティに満ちていた。

公園で遊んでいると、ときどき小さな子が口のまわりを砂だらけにして号泣しているのを見かけた。そのたびに、^③そわそわした気持ちになった。

わたしも砂を食べた経験があったからだ。

砂は食べられないし、食べてはいけないものだとなっていた。でもあるとき、砂がどんな味なのか、どうしても確かめずにはい

られなかった。

味見のつもりで控えめに口に入れた。とたんに衝撃がはしる。歯にじやりつとあたる嫌な感覚。埃っぽくて苦みもある。あわてて吐きだそうにも、口のなかにまとわりつくばかり。その不快感と、食べてはいけないうものを食べてしまったという恥ずかしさで、嗚咽するうちに、じやりじやりに塩味もくわわった。

幼い子どもは、手当たり次第に手をのびし、なんでも口に入れてしまう。それは、食べられるか食べられないかの分別がつかないからではない。触覚が最初に発達するのが口のまわりだからだ。幼い子どもにとつて身のまわりのものは、まだ見知らぬ、なんだかわからない物だらけ。一つひとつ、手や口で触れるという感覚をとおして、世界を知ろうとしているのだ。

④ 成長するにつれて、なんでも口に入れて確かめることはなくなる。直接触らなくても、見ただけで「なにか」がわかるし、見ただけで、すべすべ、ざらざら、ごつごつ、ふわふわなどの質感も認識できるようになるからだ。

もっとも、見たことのないような質感のものがあると、おとなでもつい触りたくなる。

学生のころ、友人が新しい軟膏の容器を開けるのをぼんやり見ていた。半透明のつやつや光るクリームが容器にびたつと詰まっている。次の瞬間、なぜかわたしは指はその白い柔らかな物体のなかに飛び込んでいた。とっさのことに友人はぼかんとしていたが、自分でも「思わず」だったので驚いた。案外、砂を食べた幼いころと変わっていなかった。

質感の認知に関する最近の研究によると、物を見るときに感じる質感は「見て触れる」という経験によってつくられるという。生理学研究所の郷田直一さんらは、質感の異なる素材の写真をサルに見せたときの脳活動を調べた。このとき実際に素材を「見て触れる」経験をすると、肌触りが似た質感の素材を見たときの脳の反応が似てくる。つまり質感を見分けられるようになるようだ。

わたしたちが物を見て感じる質感は、過去に似たような見た目の物を触った記憶によってつくられる。だから子どものころに砂を食べた経験の有無で、砂の見え方もきつと違うのだろう。そもそも、人それぞれ積み重ねてきた経験が違うのだから、物の見え方も同じではないということだ。

⑤ 砂を深く掘ると出てくる石ころのように、原稿を書くうちに、子どもころの記憶が次々と掘りおこされた。とくにリアルに思い出されたのは、触覚や嗅覚などの感覚の記憶だ。砂だけでなく、木のほりをしたネムノキの肌触り、鉄棒の冷たさや握った手の鉄の匂い、手の甲を這うアリの細かい脚の動き。いまの自分の「見る」は、こういうたくさんの感覚経験が支えているのだなと思った。見て触れる。見て嗅ぐ、見て味わう、見て聞く。触覚だけにとどまらず、複合的な感覚経験を積み重ねることが「見る」という視覚体験を豊かにするのだろう。

それは作品を観るときにも影響しているはずだ。

B 油絵は、色や質感の表現に長けていて、透明なガラスに鈍く光る真鍮、上等なシルクにざつくりした木綿など、さまざまな質感の違いを写實的に表現できる。ちよつとぐらいプロポーションがくるついても案外気づかなかつたりするので、形よりも質感の方がリアルさに影響しそうだ。質感に触覚経験が含まれるので、より直接的に感じるからだろう。無機物に比べて人の肌や目の描写がむずかしいのは、それが温度やゆらぎのある繊細な質感だからかもしれない。

ただ、どんなに緻密に描きこまれた写真表現でも、なんとなくつくりものっぽいこともあるし、大胆な表現なのにリアルさを感じることがある。

⑥ ***モノの睡蓮もその一つだ。**少しピントをずらして見ることで、リアルな空間がたちあがって、日差しや風や湿度さえも感じられる気がしてくる。

***円山応挙の作品でも、細かく緻密に描きこまれた絵よりも、大胆な筆致で描かれた絵に、よりリアルさを感じる。**たとえば「雪松図」。一見すると、金屏風に墨で松を描き、積もった雪を胡粉の白で描いているように見える。でも実際には、白い紙に金泥と墨で描いてあり、ふんわり積もった雪の白は、描かずに見せている紙の地色だ。老いた松の鱗のようなリアルな木肌も、近寄るとその筆の大胆さに驚く。

じっと見ていると、しんとした空間から冷たい空気が流れ込んでくるような気がした。

モノの絵と共通するリアリティ。それは自分のからだだが絵と同じ空間に入り込んだような身体感覚だった。

二年ほど前に見た、メディア・アートの藤幡正樹さんの作品「Portray the Silhouette」でも、からだが作品に入り込む感覚を味わった。

部屋のなかにテーブルと椅子があり、その影が横の壁に映しだされている。そこに、プロジェクタで投影された藤幡さんの影があらわれ、コーヒーをいれたり、椅子に座って本を読んだりする。鑑賞している自分の影も投影されるので、椅子に座ると、影同士が同じテーブルを囲んだりできる。

とてもリアルだった。*
ポストドクのときに藤幡さんの研究室でお世話になっていたので「おひさしぶりです」と影にお辞儀したくなるような変な気持ちになった。

影にはもともと質感がない。影として、ただ光を遮るものとして存在するとき、いまここにいる自分と、いまここにはいない藤幡さんに区別がなかった。

考えてみれば、この作品も「不在」のアートの一つだ。ここで不在なのは、藤幡さんという実体。でも、影が同じ平面にあることで、実体も同じ空間にいるような気がしてくる。不在を補って想像される実体は、映像やホログラムなどの実体の虚像よりも、ずっとリアルな存在感があった。

C アニメーションでは、絵を重ねることで動きのリアルさを生み出す。アニメーション作家の山村浩二さんは、意外にもその本質が不連続性にあるとおっしゃっていた。絵の静止や断絶がアニメーションの新しい動きを生み出し、ぎこちなさが想像力の補完をうながすのだという。

注 *モネ……フランスの画家。「睡蓮」はその代表作。

*円山応挙……江戸時代の日本の画家。

*ポストドク……大学院博士後期課程を修了した後に就く研究職。

不在や不連続性があると、わたしたちは、それを補うために想像力をはたらかせる。想像するための素材は自分の知識や記憶だから、実体験や感覚の記憶がひきだされるほど、よりリアルな鑑賞体験になるのだろう。とくに、忘れていた深い記憶や情動がともなう記憶は、強いリアリティに関わりそうだ。

⑨ 中学生のころ、理科の教科書をばらばらめくっていて、急に鳥肌が立ったことがあった。そのページには、金属中を流れる電気の様式図が描かれていた。陽イオンの「+」マークが並んでいる周りを自由電子の「-」マークが飛び回っているだけの無機質なものだ。不思議に思い、怖いもの見たさでときどきそのページを開いた。そのたびに鳥肌が立つが理由はわからない。その後すっかり忘れていたが、高校生になったある日、電車のなかでふいにその謎が解けた。ああ、あれは病院の赤十字マークだったのだ、と唐突に腑に落ちたのだ。

右目の疾患のために、生後二カ月のころから病院通いをしていた。もちろんそのころの記憶はまったくない。母によると、赤ん坊のわたしは、眼科の暗室のなかで機器に固定されて検査を受け、泣き叫ぶ声が廊下まで響き渡っていたそうだ。教科書の陽イオンの+マークは、乳児のころの言語化される以前の思い出せない記憶に結びついていていたのではないか。そう思えたとき、極度の病院嫌いも少しだけ軽くなった。

「怖い」などの情動は、心拍数の増加や発汗など、自律神経系の作用をおこす。それが「からだで感じる」という強いリアリティを生み出すのだろう。それは「美しい」にも関わる重要な作用だ。

触覚にむすびついた質感、作品に入り込んだような身体感覚、呼びおこされる感覚の記憶、情動による身体的作用。作品に感じるリアリティは、「からだで感じる」という実感に深く関わっていきそうだ。鑑賞体験を豊かにするには、やはり現実「からだで感じる」体験を充実させることなのだと思う。

（斎藤亜矢「仮想と現実」―『ルビンのツボ 芸術する体と心』より）

問一

1 A 2 C にあてはまる言葉の組み合わせとしてもつとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- | | | | | | | |
|---|---|------|---|------|---|------|
| 1 | A | しかし | B | それとも | C | たとえば |
| 2 | A | なぜなら | B | そして | C | あるいは |
| 3 | A | じつは | B | さらに | C | そもそも |
| 4 | A | でも | B | たとえば | C | いっぽう |

問二 ——— 線①「穴の存在を知らない体^{てい}で歩いて、うっ、かり、落ちる」とはどういうことですか。もつとも適当なものを次の1～4か

ら一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 自分で作った落とし穴に誰かがはまるのがあまりにも楽しみで、その誰かが来る前に穴に気づかないふりをしてわざと穴の近くまで行き、自分が穴にはまるということ。
はまるという失敗をしようということ。
- 2 せっかく誰かを落とそうとたくらんで落とし穴を掘ったのに、穴を確認するために近づいた際に、不注意にも自分自身が穴にはまるという失敗をしようということ。
近づいて行き、はまってみるということ。
- 3 落とし穴に誰かがはまるのを待っているうちに、実際に自分で穴に落ちる感覚を確かめてみたくなって、まっしぐらに穴まで近づいて行き、はまってみるということ。
- 4 わざわざ落とし穴を作ったのに誰も穴に落ちないので、獲物を穴に誘い込むおとりとして自分が穴に落ちるふりをしようとして、思わず自分が穴に落ちてしまうということ。

問三 —— 線② 「生きていることのリアリティ」を感じられる体験の例にあてはまらないものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 主人公が冒険ぼうけんをくり広げる物語を読んで、胸をおどらせた。
- 2 きれいにたたまれた新聞紙を破いて、びりびりにさける手ごたえを感じた。
- 3 暑い夏の日に橋の上から川に飛び込んで、水の冷たさにおどろいた。
- 4 大好きなシチューをほおぼって、口いっぱいにあたかさとおいしさが広がった。

問四 —— 線③ 「そわそわした気持ちになった」理由としてもっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 すくうと水のように流れ落ちる変化自在な砂で遊んだことを思い出し、さらさらとした様子や手にかかるときのくすぐったさを思い出したから。
- 2 食べられない上に食べてはいけないものだとわかっていた砂を食べたことを思い出し、そのときの不快感や恥ずかしさがよみがえってきたから。
- 3 砂で遊んでから家に帰ると身体ひろうかんのあちこちからばらばらと砂が落ちてきたことを思い出し、全身で砂とたわむれていた後の疲労感ひろうかんを思い出したから。
- 4 砂の上では高いところから飛び降りても全力で走ったり転んだりしても痛くなかったことを思い出し、なつかしさと胸がいっぱいになったから。

問五 —— 線④「成長するにつれて、なんでも口に入れて確かめることはなくなる」とありますが、子どもの行動がこのように変化するのはなぜですか。その理由を説明した次の文の I・II にあてはまるように、文中から I は五字以上十字以内で、II は十字以上十五字以内でそれぞれぬき出しなさい。

幼い子どもにとって身のまわりにあるのは未知のものばかりなので、I する口のまわりで触れることで世界を知ろうとするが、成長すると II、それがなにかということやその質感が認識できるようになるから。

問六 —— 線⑤「砂を深く掘ると出てくる石ころのように」とありますが、「石ころ」がたとえているものを本文中から五字以上十字以内でぬき出しなさい。

問七 —— 線⑥「モネの睡蓮^{すいれん}」と —— 線⑦「雪松図」は、ともにどのような作品の例として挙げられていますか。もつとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 緻密に描きこまれたわけではないのに、写実的な表現によって見る者に質感のリアルさを感じさせる作品。
- 2 色や質感の表現に長けており、緻密な表現によって描かれた繊細な質感が見る者にリアルさを感じさせる作品。
- 3 思いきった表現なのに、あたかも自分が作品の中にいるかのようなリアルな身体感覚を見る者にもたらず作品。
- 4 一見すると緻密に描きこまれたリアルな表現だが、よく見ると実に大胆な筆致で描かれたことが分かる作品。

問八 —— 線⑧「いまここにいる自分と、いまここにはいない藤幡さんに区別がなかった」のは、何が行われているからですか。

—— 線⑧より後の文中から六字でぬき出しなさい。

問九 —— 線⑨ 「中学生のころ、理科の教科書をばらめくっていて、急に鳥肌とりはだが立ったことがあった」とありますが、その原因はどのようなことだと考えられますか。もっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

1 陽イオンのマークが乳児のころに通った病院の赤十字マークと似ていたために、自分では思い出せないが、機器に固定されて検査を受けるのがいやで泣き叫んだときの感覚が呼び起こされたこと。

2 陽イオンのマークが、言葉で表現できなくなった最初の記憶として意識の底に入りこんでいた病院の赤十字マークを連想させ、検査を受けるときの暗くおそろしい感覚がよみがえってしまうこと。

3 中学生になってから陽イオンと自由電子のマークを見たことで、十年以上も思い出さないようにしていた病院の暗室で機器に固定され検査を受けたいやな記憶がしばしばよみがえるようになったこと。

4 陽イオンのマークが、乳児のころ通っていた病院の赤十字のマークと似ているように思え、機器に固定されて検査を受けた十数年前の乳児のころの記憶がよみがえってきて病院が嫌いになったこと。

問十 —— 線⑩ 「鑑賞体験を豊かにするには、やはり現実に「からだで感じる」体験を充実じゅうじつさせることなのだと思う」とありますが、「からだで感じる」体験によって作品を観るといふ体験が豊かになった身近な例を自分で探して、九十字以上百字以内で説明しなさい。なお、どのように豊かになったのかにも触れること。

三

次の1～6の——線のカタカナを漢字で書きなさい。

- 1 先生に自分の作品をコウヒョウしていただく。
- 2 ウチュウには無数の星がきらめいている。
- 3 話し合いを三日後にノばす。
- 4 病院でイチヨウの検査を受ける。
- 5 日光をアびてその建物はかがやいて見えた。
- 6 新入部員を試合のメンバーとしてトウロクする。

問題は以上です

